

# 日本新八景の選定をめぐる諸運動と松江市

長尾 隼

## はじめに

今日、特定の地域や場所について考える際に、場所をめぐる表象やイメージの働きについて考察することは避けて通れない作業であるように思われる。ビジュアル・メディアが驚異的な発達を見せる現代では、多様な方法で場所が表象され、かかる表象が場所に具現化されてゆくというように、場所と表象の相互浸透がますます進行している。イメージや表象は単に現実世界の模倣なのではなく、それ自体が世界に意味や価値を与え、現実を構築していくのである (Dubow 2009)。

場所—表象の相互浸透という状況は、その場所に特定のコンテクストのもとで偶有的に節合されたはずの表象を、その場所の属性として先駆的に存在したかのようにみせる傾向がある。場所はそれ自体意味を有しているわけではなく、われわれが何らかの働きかけを行うことによって意味づけられてゆく。場所に固有の意味や価値がすでに内在しているわけではなく、意味や価値を場所に充填させるプロセスが存在することに注意しておきたい<sup>(1)</sup>。

われわれが日々知覚する場所の現実的構成は、こうしたプロセスが一体どれほど折り重り、そしてその堆積のどの部分が切り取られ読み込まれることで生み出されてきたものなのか。その具体と歴史的系譜について、一度腰を据えて問い合わせし、明らかにしてゆく作業が必要であろう<sup>(2)</sup>。

上記の課題を念頭に置きつつ、この小稿では、1927(昭和2)年に行われた日本新八景の選定というメディア・イベントを取りあげ、松江や宍道湖という特定の場所とその表象をめぐる関係について検討してみることとしたい。

日本新八景の選定とは、大阪毎日新聞と東京日日新聞の合同企画として実施されたメディア・イベントであった。「日本全国（本土、九州、四国及び北海道）の山岳、渓谷、瀑布、温泉、湖沼、河川、平原の八景から各代表的第一勝を選びこれを推薦選定」し、「風景の決算を試みよう」という趣旨をもつものであった（大阪毎日新聞；1927年4月9日付）。八景の候補地は一般からの葉書投票によって募集されたが、この投票運動は全国的な広がりを見せるに至った。当時の日本の人口は約6,000万人前後を数えていたが、この企画の最終的な有効投票数は9,300万票以上に上ったのである。各地で投票の組織化が行われ、山陰地方でも熱狂的な投票運動が展開された。

松江市でも投票を取りまとめる運動が生じていた。投票の対象とされたのは宍道湖という自然環境であり、このイベントを通して、湖には様々な視線が投げかけられることになった。日本新八景の選定という特定のコンテクストのもとにおいて、宍道湖は何らかの意味や価値を伴う“風景”として仕立てあげられた。

本稿の構成は以下の通りである。まず次章で、日本新八景の選定というイベントの全体像について紹介する。2章では、松江市を含む山陰地方一帯が、このイベントをどのように受容していたのかを明らかにしてゆく。3章では、このイベントを通して特定の場所がどのように表象されたのか、そしてその作用は現実世界の諸関係にどのような影響を与えたのか、松江市（宍道湖）を事例として考察する。

主な資料として、この企画を主催した大阪毎日新聞社が発行していた「大阪毎日新聞」本紙、および当時山陰地方で購読され流通していた「大阪毎日新聞山陰版」を使用した<sup>(3)</sup>。また、同時代の言説を確認するために、当時発行された各種刊行物やプリントメディア等も適宜使用している。

表1 日本新八景選定をめぐる事項

事　　項	日　付
①「日本新八景」選定企画の発表	4月9日
②一般投票の開始	
③「百景」選定の追加発表	5月5日
④一般投票の締切	5月20日
⑤一般投票結果の発表	6月5日
⑥第1回審査委員会	6月11日
⑦第2回審査委員会	7月3日
⑧審査結果の発表	7月6日

注) 日付の年次はいずれも1927(昭和2)年。

選定規定が報道されている(資料1)。「日本全国」から、「昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景」を、山岳・渓谷・湖沼・海岸・河川・平原・瀑布・温泉の8部門において選定しようというのが企画の骨子であった<sup>(4)</sup>。選定の方法は、まず読者からの葉書投票によって風景地を募集し、この投票結果に基づき、審査委員会が「八景」を決定することになっていた。読者からの投票は4月10日から受付が開始され、5月20日に締め切られた。有効投票数は93,423,971票、推薦された風景地は1,470ヶ所に上っている。企画が開始された当初は山岳以下8部門の代表として「八景」のみを選定することになっていたが、反響の大きさもあり、八景選外の風景地から「二十五勝」および「百景」も選定することが決定された。「八景」「二十五勝」「百景」を決定するのは、学者、専門家、文学者、官僚、会社役員等からなる審査委員会であった<sup>(5)</sup>。そして7月6日付の新聞紙上において、選定された「八景」「二十五勝」「百景」の133ヶ所が報道さ

## 1. 日本新八景選定というメディア・イベント

日本新八景の選定という出来事について大まかな見取り図を提示しておこう。この出来事は、1927(昭和2)年、大阪毎日新聞および東京日日新聞の主催、鉄道省の後援によって実施された、風景地の人気投票とでもいべき企画であった。企画に関わる事項を時系列的に確認していこう。事項を整理した表1もあわせて確認されたい。

企画が発表されたのは4月9日付の大坂毎日新聞の紙面上においてである。「『日本新八景』の選定」というタイトルの囲み記事で、この企画の趣旨と投票・

### 資料1 日本新八景選定の趣旨

『日本新八景』の選定 各第一勝を募る

[選定種目] 山岳 渓谷 瀑布 温泉 湖沼 河川 海岸 平原

輝かしい自然、美しい山水、われ等の日本が持つ多くの誇りの中に、その自然美を高唱し得ることはわれ等の大きいなる喜びであります。けれども、これまで名所といひ、勝景とよばれていたもの多くは、全く古人の一部の趣味と、片よった鑑賞とによって定められたもので、われ等の好尚を代表すべく、あまりに隔たりがありすぎます、昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景は、よろしくわれ等の新しい好尚によって選定されなくてはなりません、これ本社がこの昭和の御代の初頭において「日本新八景」の選定を江湖にお計りするゆえんであります、左にその選定方法を発表すると共にあまねく皆さんと共にこの計画を遂行せんことを期するものであります

『日本新八景』の投票と選定方法

- 一、日本全国(本土、九州、四国及び北海道)の山岳、渓谷、湖沼、海岸、河川、平原、瀑布、温泉の八景から各代表的第一勝を選びこれを推薦選定す。
- 二、推薦は一般公衆によって行はれる。
- 三、推薦投票は一般公衆から募集する、用紙は官製葉書に限り一景一枚と定む。
- 四、各景毎に推薦投票高点順十位宛を候補地とし、これを審査委員会に移して同委員の手により厳選決定す。
- 五、審査委員会は各方面の学者専門家を主体として組織せらる。
- 六、選定せられたる新八景は鉄道省において公認し種々の方法によって永くこれを紹介す。
- 七、審査委員会によって決定された新日本八景に入選した各景の投票者一千名(八景八千名)に記念品を贈呈し、別に一景につき一等一名、二等二名、三等三名(八景にて一等八名、二等十六名、三等二十四名)に賞を贈る。但しあづれも抽選による。
- 八、新八景地に著名文士と書家を派し、その紀行文並にスケッチを大阪毎日、東京日日両紙上に連載する。

(大阪毎日新聞1927(昭和2)年4月9日付より引用。)

れたのである。以上がこのイベントの概要である。

このイベントに関しては、これまでに地理学、造園学、観光史などの分野において検討が進められている<sup>(6)</sup>。主な先行研究が指摘する点について簡単に整理しておこう。白幡(1992)は、「ある風景が特定の時期にもてはやされる、その仕組みはどうなっているのか」という問い合わせとともにこのイベントを取りあげ、企画全体の大枠を提示し、八景選定のプロセス、各地で組織的な得票運動が見られたことなどを明らかにした。荒山(2003)は投票の集計分析を行い、ほぼ全国にわたる大規模な集合的参加があつた点、総投票数の99%以上は組織票によってもたらされた点などを明らかにし、このイベントが地域における“郷土”意識を醸成させる作用をもたらしたことを指摘した。また新田(2005, 2010)は、新聞社主催事業の系譜を辿ることで、このイベントの性格を詳細に浮かび上がらせようするとともに、同時代における観光との関係についても検討を試みた。これらの研究の成果から、日本新八景の選定という企画それ自体については多くが明らかにされてきているといえよう。また、個別地域における投票運動の分析も開始されつつある(関戸2005, 近藤2011)。

日本新八景選定と松江市を含む山陰地方一帯との関わりについては、管見の限り川上(1994)による言及が確認されるのみであった<sup>(7)</sup>。山陰地方の各市町村の自治体史等にはこの出来事と地域との関わりについての記述は見受けられず、いわばローカルな地域の公的な「歴史／物語」に整合されない出来事であったことが伺える。このイベントと地域との関わり合いを問い合わせ直すことは、地域をめぐるこれまでの記述から漏れ落ちてきた、非-公式の「語り」を読み解いてゆく作業とも接点を持つだろう<sup>(8)</sup>。

## 2. 山陰地方におけるイベントの受容

### (1) 新聞報道からみる運動の展開

本章では松江市を含む山陰地方がこのイベントをどのように受容していったのか、当時の新聞報道などを手がかりとしながら明らかにしていきたい。

6月10日付の紙面上には、投票が確認されたすべての候補地とその得票数とが一覧化され報道されている(資料2)。この紙面に掲載された情報から分析をはじめてみよう。

表2は島根・鳥取両県において得票が確認された候補地の一覧である。島根県では24ヶ所、鳥取県では28ヶ所について、得票があったことがわかる。

それぞれの場所と得票数との関係に注目してみると、膨大な得票数を得ている場所が両県ともに数ヵ所ずつある一方で、得票が1票のみの場所も存在していることがわかる。得票は官製葉書1枚1枚によって行われているので、恐らく線引きは不可能であるが、一定数の票を集めている場所に関しては、個人の投票のみならず、組織的な集票活動が存在したと考えて良いだろう。

日本新八景選定の得票を集計分析した荒山は、得票が確認された1,470ヶ所のうち、10万票以上の得票を集めた場所が145ヶ所である一方で、得票100票未満の場所は全体の約8割にのぼる1,138ヶ所であったことを明らかにしている。また、総得票数約9,350万票のうち、10万票以上を獲得した145ヶ所の風景地への得票数が全体の97%を、1万票以上を獲得した風景地を合計すると99%を占めていることも明らかにした。この分析から、①得票が確認された合計1,470の風景地のうち、その大半は個人的な参加によってリストアップされたこと、②その一方で、総投票数の約9,350万票のうち、99%以上は大がかりな組織票によって占められていたことの2点を指摘している(荒山2003;98)。かかるコントラストは、島根・鳥取両県の風景地への得票からも読み取ることができるだろう<sup>(9)</sup>。

表3は、得票が確認された山陰地方の候補地のうち、組織的な集票活動が存在した可能性が高いと思われる得票数1万票以上の候補地をとりあげ(鳥取県の大山除く)、これらの場所が投票期間中どのような

資料2 公表された全候補地とその得票数

日本新八景選定投票一覽表		投票総数	
得票	順位	景名	得票
1001.5	1	山岳	原川
900.5	2	湖沼	岳布
800.5	3	温泉	瀧
700.5	4	海岸	海
600.5	5	平野	原
500.5	6	河川	川
400.5	7	溪谷	渓
300.5	8	山岳	岳
200.5	9	湖沼	沼
100.5	10	温泉	泉
50.5	11	海岸	海
0.5	12	平野	原
0.5	13	河川	川
0.5	14	溪谷	渓
0.5	15	山岳	岳
0.5	16	湖沼	沼
0.5	17	温泉	泉
0.5	18	海岸	海
0.5	19	平野	原
0.5	20	河川	川
0.5	21	溪谷	渓
0.5	22	山岳	岳
0.5	23	湖沼	沼
0.5	24	温泉	泉
0.5	25	海岸	海
0.5	26	平野	原
0.5	27	河川	川
0.5	28	溪谷	渓
0.5	29	山岳	岳
0.5	30	湖沼	沼
0.5	31	温泉	泉
0.5	32	海岸	海
0.5	33	平野	原
0.5	34	河川	川
0.5	35	溪谷	渓
0.5	36	山岳	岳
0.5	37	湖沼	沼
0.5	38	温泉	泉
0.5	39	海岸	海
0.5	40	平野	原
0.5	41	河川	川
0.5	42	溪谷	渓
0.5	43	山岳	岳
0.5	44	湖沼	沼
0.5	45	温泉	泉
0.5	46	海岸	海
0.5	47	平野	原
0.5	48	河川	川
0.5	49	溪谷	渓
0.5	50	山岳	岳
0.5	51	湖沼	沼
0.5	52	温泉	泉
0.5	53	海岸	海
0.5	54	平野	原
0.5	55	河川	川
0.5	56	溪谷	渓
0.5	57	山岳	岳
0.5	58	湖沼	沼
0.5	59	温泉	泉
0.5	60	海岸	海
0.5	61	平野	原
0.5	62	河川	川
0.5	63	溪谷	渓
0.5	64	山岳	岳
0.5	65	湖沼	沼
0.5	66	温泉	泉
0.5	67	海岸	海
0.5	68	平野	原
0.5	69	河川	川
0.5	70	溪谷	渓
0.5	71	山岳	岳
0.5	72	湖沼	沼
0.5	73	温泉	泉
0.5	74	海岸	海
0.5	75	平野	原
0.5	76	河川	川
0.5	77	溪谷	渓
0.5	78	山岳	岳
0.5	79	湖沼	沼
0.5	80	温泉	泉
0.5	81	海岸	海
0.5	82	平野	原
0.5	83	河川	川
0.5	84	溪谷	渓
0.5	85	山岳	岳
0.5	86	湖沼	沼
0.5	87	温泉	泉
0.5	88	海岸	海
0.5	89	平野	原
0.5	90	河川	川
0.5	91	溪谷	渓
0.5	92	山岳	岳
0.5	93	湖沼	沼
0.5	94	温泉	泉
0.5	95	海岸	海
0.5	96	平野	原
0.5	97	河川	川
0.5	98	溪谷	渓
0.5	99	山岳	岳
0.5	100	湖沼	沼
0.5	101	温泉	泉
0.5	102	海岸	海
0.5	103	平野	原
0.5	104	河川	川
0.5	105	溪谷	渓
0.5	106	山岳	岳
0.5	107	湖沼	沼
0.5	108	温泉	泉
0.5	109	海岸	海
0.5	110	平野	原
0.5	111	河川	川
0.5	112	溪谷	渓
0.5	113	山岳	岳
0.5	114	湖沼	沼
0.5	115	温泉	泉
0.5	116	海岸	海
0.5	117	平野	原
0.5	118	河川	川
0.5	119	溪谷	渓
0.5	120	山岳	岳
0.5	121	湖沼	沼
0.5	122	温泉	泉
0.5	123	海岸	海
0.5	124	平野	原
0.5	125	河川	川
0.5	126	溪谷	渓
0.5	127	山岳	岳
0.5	128	湖沼	沼
0.5	129	温泉	泉
0.5	130	海岸	海
0.5	131	平野	原
0.5	132	河川	川
0.5	133	溪谷	渓
0.5	134	山岳	岳
0.5	135	湖沼	沼
0.5	136	温泉	泉
0.5	137	海岸	海
0.5	138	平野	原
0.5	139	河川	川
0.5	140	溪谷	渓
0.5	141	山岳	岳
0.5	142	湖沼	沼
0.5	143	温泉	泉
0.5	144	海岸	海
0.5	145	平野	原
0.5	146	河川	川
0.5	147	溪谷	渓
0.5	148	山岳	岳
0.5	149	湖沼	沼
0.5	150	温泉	泉
0.5	151	海岸	海
0.5	152	平野	原
0.5	153	河川	川
0.5	154	溪谷	渓
0.5	155	山岳	岳
0.5	156	湖沼	沼
0.5	157	温泉	泉
0.5	158	海岸	海
0.5	159	平野	原
0.5	160	河川	川
0.5	161	溪谷	渓
0.5	162	山岳	岳
0.5	163	湖沼	沼
0.5	164	温泉	泉
0.5	165	海岸	海
0.5	166	平野	原
0.5	167	河川	川
0.5	168	溪谷	渓
0.5	169	山岳	岳
0.5	170	湖沼	沼
0.5	171	温泉	泉
0.5	172	海岸	海
0.5	173	平野	原
0.5	174	河川	川
0.5	175	溪谷	渓
0.5	176	山岳	岳
0.5	177	湖沼	沼
0.5	178	温泉	泉
0.5	179	海岸	海
0.5	180	平野	原
0.5	181	河川	川
0.5	182	溪谷	渓
0.5	183	山岳	岳
0.5	184	湖沼	沼
0.5	185	温泉	泉
0.5	186	海岸	海
0.5	187	平野	原
0.5	188	河川	川
0.5	189	溪谷	渓
0.5	190	山岳	岳
0.5	191	湖沼	沼
0.5	192	温泉	泉
0.5	193	海岸	海
0.5	194	平野	原
0.5	195	河川	川
0.5	196	溪谷	渓
0.5	197	山岳	岳
0.5	198	湖沼	沼
0.5	199	温泉	泉
0.5	200	海岸	海
0.5	201	平野	原
0.5	202	河川	川
0.5	203	溪谷	渓
0.5	204	山岳	岳
0.5	205	湖沼	沼
0.5	206	温泉	泉
0.5	207	海岸	海
0.5	208	平野	原
0.5	209	河川	川
0.5	210	溪谷	渓
0.5	211	山岳	岳
0.5	212	湖沼	沼
0.5	213	温泉	泉
0.5	214	海岸	海
0.5	215	平野	原
0.5	216	河川	川
0.5	217	溪谷	渓
0.5	218	山岳	岳
0.5	219	湖沼	沼
0.5	220	温泉	泉
0.5	221	海岸	海
0.5	222	平野	原
0.5	223	河川	川
0.5	224	溪谷	渓
0.5	225	山岳	岳
0.5	226	湖沼	沼
0.5	227	温泉	泉
0.5	228	海岸	海
0.5	229	平野	原
0.5	230	河川	川
0.5	231	溪谷	渓
0.5	232	山岳	岳
0.5	233	湖沼	沼
0.5	234	温泉	泉
0.5	235	海岸	海
0.5	236	平野	原
0.5	237	河川	川
0.5	238	溪谷	渓
0.5	239	山岳	岳
0.5	240	湖沼	沼
0.5	241	温泉	泉
0.5	242	海岸	海
0.5	243	平野	原
0.5	244	河川	川
0.5	245	溪谷	渓
0.5	246	山岳	岳
0.5	247	湖沼	沼
0.5	248	温泉	泉
0.5	249	海岸	海
0.5	250	平野	原
0.5	251	河川	川
0.5	252	溪谷	渓
0.5	253	山岳	岳
0.5	254	湖沼	沼
0.5	255	温泉	泉
0.5	256	海岸	海
0.5	257	平野	原
0.5	258	河川	川
0.5	259	溪谷	渓
0.5	260	山岳	岳
0.5	261	湖沼	沼
0.5	262	温泉	泉
0.5	263	海岸	海
0.5	264	平野	原
0.5	265	河川	川
0.5	266	溪谷	渓
0.5	267	山岳	岳
0.5	268	湖沼	沼
0.5	269	温泉	泉
0.5	270	海岸	海
0.5	271	平野	原
0.5	272	河川	川
0.5	273	溪谷	渓
0.5	274	山岳	岳
0.5	275	湖沼	沼
0.5	276	温泉	泉
0.5	277	海岸	海
0.5	278	平野	原
0.5	279	河川	川
0.5	280	溪谷	渓
0.5	281	山岳	岳
0.5	282	湖沼	沼
0.5	283	温泉	泉
0.5	284	海岸	海
0.5	285	平野	原
0.5	286	河川	川
0.5	287	溪谷	渓
0.5	288	山岳	岳
0.5	289	湖沼	沼
0.5	290	温泉	泉
0.5	291	海岸	海
0.5	292	平野	原
0.5	293	河川	川
0.5	294	溪谷	渓
0.5	295	山岳	岳
0.5	296	湖沼	沼
0.5	297	温泉	泉
0.5	298	海岸	海
0.5	299	平野	原
0.5	300	河川	川
0.5	301	溪谷	渓
0.5	302	山岳	岳
0.5	303	湖沼	沼
0.5	304	温泉	泉
0.5	305	海岸	海
0.5	306	平野	原
0.5	307	河川	川
0.5	308	溪谷	渓
0.5	309	山岳	岳
0.5	310	湖沼	沼
0.5	311	温泉	泉
0.5	312	海岸	海
0.5	313	平野	原
0.5	314	河川	川
0.5	315	溪谷	渓
0.5	316	山岳	岳
0.5	317	湖沼	沼
0.5	318	温泉	泉
0.5	319	海岸	海
0.5	320	平野	原
0.5	321	河川	川
0.5	322	溪谷	渓
0.5	323	山岳	岳
0.5	324	湖沼	沼
0.5	325	温泉	泉
0.5	326	海岸	海
0.5	327	平野	原
0.5	328	河川	川
0.5	329	溪谷	渓
0.5	330	山岳</	

表2 日本新八景選定における山陰両県の得票

島根県			
景観	場所	得票数	部門中得票順位と結果
山岳	十神山	8	75位
河川	江川★	50,266	10位／百景に入選
海岸	周布川	2	43位
	大橋川	1	44位
	美保ヶ関★	244,397	38位
	出雲浦北海岸★	11,785	61位
	杵築港	502	75位
	浜田港	43	106位
	大根島海岸	3	131位
	日御崎海岸	2	132位
	中ノ海	1	133位
	地蔵岬	1	同上
湖沼	稻佐浜	1	同上
	十神山海岸	1	同上
	宍道湖★	684,018	4位／百景に入選
温泉	中海	1	35位
	松江温泉	1	69位
瀑布	玉造温泉	1	69位
	清滝	5	50位
渓谷	断魚渓★	14,383	29位
	鬼の舌震	4	55位
	立杭	1	58位
平原	三瓶ヶ原	2	49位

鳥取県			
景観	場所	得票数	部門中得票順位と結果
山岳	大山	3,230	37位／百景に入選
	久松山	68	56位
	打吹山	2	81位
	船上山	1	82位
	比波の山	1	同上
河川	小鴨川	1	44位
海岸	浦富海岸★	675,905	19位／百選に入選
	弓ヶ浜	9	125位
	境港	1	133位
	千岩松	1	同上
	八橋	1	同上
	鶴見浜	1	同上
湖沼	湖山池	3	33位
温泉	三朝温泉★	570,356	5位／百景に入選
	皆生温泉★	284,308	16位
	岩井温泉★	254,582	19位
	関金温泉★	47,325	26位
	東郷温泉	16	58位
	湖上温泉	5	65位
	末広温泉	2	68位
	新東伯温泉	1	69位
	千丈ヶ滝★	22,343	18位
瀑布	蛇谷の滝	195	27位
渓谷	竜頭ヶ滝	1	54位
	石霞渓	305	34位
	樗谿	1	58位
平原	小鴨川	1	同上
	大山裾野	1	50位

注) 大阪毎日新聞1927(昭和2)年6月10日付より作成。

★は1万票以上の得票を集めた候補地。

推移を経て票を重ねていったのかを集計したものである。1万票以上の得票が確認されたのは、票数の多い順に、島根県では宍道湖、美保ヶ関、江川、断魚渓、出雲浦北海岸の5ヶ所、鳥取県では浦富海岸、三朝温泉、皆生温泉、岩井温泉、関金温泉、千丈ヶ滝の6ヶ所であった。

大阪毎日新聞および東京日日新聞では、4月16日付の紙面より、候補地への投票の集計結果を掲載はじめた。この掲載は6月5日付の紙面までほぼ毎日続けられた。掲載の体裁は、基本的に紙面の日付3日前の正午時点における各候補地の得票数および順位を、8部門それぞれの得票順に列挙してゆくというものであった。5月11日付の紙面より、掲載される情報は3日前正午時点における“得票数”から“整理票数”へと変更されているが、これは新聞社に送付される葉書の量が増加し、集計整理が追いつかなくなつたことが影響していると推測される。また、紙面に掲載される候補地数の基準は日によってばらつきがあった。4月19日付の紙面以降は得票数10票以上、24日付以降は100票以上の候補地が、28日付以降は各部門16位以上の候補地が掲載されている。16位以下の候補地については、5月8日以降、地方紙面に掲載されるようになった。これも16位以下の候補地全てが報道されたわけではなく、日によってばらつきがあるものの、各部門の30~35位あたりまでが掲載された。このようにして、候補地の得票数と順位は、日々紙面に掲載された。

残された資料は少ないものの、当時の新聞報道や表3を手がかりとしながら、山陰地方における日本新八景選定という出来事の受容の様子を以下に明らかにしていきたい。次節では、表3に掲げた候補地のうち、島根県内に立地する宍道湖、美保が関、江川について主に検討する。

## (2) イベントの受容－島根県内の候補地

### i 宍道湖<sup>[10]</sup>

山陰地方で最も票を集めたのは宍道湖であった。企画開始3日後に10票の得票が確認されて以降、最終的には684,018票を集めることとなった。これは湖沼の部で第4位となる得票数であった。

表3 山陰地方の主要候補地における得票と順位の推移

日付	島根県			鳥取県			新潟県			備考	
	宍道湖 得票	美保ヶ関 順位	江川 得票	宍道魚溪 得票	出雲浦北海岸 得票	蒲富海岸 順位	三朝温泉 得票	皆生温泉 得票	岩井温泉 得票	関金温泉 得票	
4月13日	10	4									2
4月14日	20	4					2	17			6
4月15日											4
4月16日	34	5									8
4月17日											4月17日付
4月18日	116	5									10票以下の候補地を報道
4月19日	134	5									?
4月20日	253	4									?
4月21日	255	4									?
4月22日	276	4									?
4月23日	324	7									?
4月24日	331	8									?
4月25日	354	9	宍道湖 ?								?
4月26日											16票以上の候補地を報道
4月27日	377	9	宍道湖 ?								?
4月28日	419	12	宍道湖 ?								?
4月29日											?
4月30日	672	11									?
5月1日	735	13	8,744	12							?
5月2日											?
5月3日	762	13									?
5月4日	775	13									?
5月5日	784	13	26,742	15							?
5月6日	904	13									?
5月7日	3,650	10									16票以下報道されず
5月8日	8,522	8	35,554	23							16票以下報道されず
5月9日	10,534	8	36,973	24							16票以下報道されず
5月10日	17,782	6	37,177	27							16票以下報道されず
5月11日	17,906	6	37,207	29							16位以下報道されず
5月12日	22,834	6	38,900	29							16位以下報道されず
5月13日	25,332	6									16位以下報道されず
5月14日	32,705	5	44,111	33							16位以下報道されず
5月15日	41,121	5	74,676	29							16位以下報道されず
5月16日	57,040	4	77,141	31							16位以下報道されず
5月17日	58,924	6	93,299	30							16位以下報道されず
5月18日	59,897	6	116,312	28							16位以下報道されず
5月19日	61,524	6	141,956	26							16位以下報道されず
5月20日	64,325	7									16位以下報道されず
5月21日	72,362	6	149,986	32							16位以下報道されず
5月22日	136,291	6	152,363	32	1,092	12	4,494	28			16位以下報道されず
5月23日	212,384	5	176,321	32	3,132	10	5,082	28			16位以下報道されず
5月24日	233,157	5	176,321	32	7,905	9	5,082	28			16位以下報道されず
5月25日	327,492	5									16位以下報道されず
5月26日	335,514	5	182,093	35	16,520	9	5,082	29			16位以下報道されず
5月27日	389,052	6									16位以下報道されず
5月28日	551,332	4	宍道湖 ?		31,202	10	6,132	28			16位以下報道されず
5月29日	607,516	4	宍道湖 ?		32,202	10	6,132	29			16位以下報道されず
5月30日	637,301	4	宍道湖 ?		36,595	10	6,141	29			16位以下報道されず
5月31日	638,195	4	宍道湖 ?		38,260	10	6,141	29			16位以下報道されず
6月1日	648,018	4	宍道湖 ?		38,303	10	6,383	29			16位以下報道されず
最終得票結果	684,018	4	244,337	38	50,286	10	14,388	29	11,785	61	16位以下報道されず
宍道湖		美保ヶ関									16位以下報道されず
(88)											

注) 大阪毎日新聞、大阪毎日新聞山陰版1927(昭和2)年4月16日～6月10日より作成。

宍道湖をめぐる投票運動で大きな役割を果たしたと思われるが、「宍道湖保勝会」なる団体であった。この団体についての情報が初めて報道されたのは4月22日付の紙面である。「風光明媚を誇る宍道湖は琵琶湖や十和田湖などを向ふに廻して湖沼の部の高点を争はれている」。その結果、「松江市民をはじめ宍道湖畔官民の歓喜一方ならず、この際わしが国さの名勝を日本はもとより世界に紹介して観光の客を吸収せんとの熱」が高まり、「松江市役所では商工会議所と手をつなぎ近く松江市内に「宍道湖保勝会」あるひは「島根風光宣揚会」なるものを組織し、大々的宣伝計画を立てあまねく目下各種団体を通じ県民の愛郷心に訴へるべく目下着々準備している」ところであるのだという。

団体の結成は「目下着々準備している」という話が出たものの、なかなか続報は出てこなかった。4月中の宍道湖の得票数は600票を超えるに留まり、当初4位でスタートした順位も11位まで後退した。

具体的な行動が確認されるのは5月に入ってからである。まず3日、松江市は参事会委員および商工会議所関係者を招集し、日本新八景の選定について「色々具体的な協議」を行い、「この際郷土を天下に紹介する意味で市当局は一肌脱いで援助する」ことを決定した。翌日の午後1時からは「全市各町村総代」および「市内有力者」を市役所に招集し、「全力を挙げて我宍道湖をすくなくとも第三位内に誓って入選せしむること」を申し合わせている。そしてこのとき、先月より計画が持ち上がっていた「宍道湖保勝会」の組閣が行われた。発起人には、松江市長、市会議員全員、商工会議所頭、商工会議所員全員、各町総代全員が名を連ねた。また、事務所は市役所内に設置されることになった。保勝会は結成直後より「投票用葉書の印刷に取りかかり、翌5日には数千票の発送が行われた」という。5月6日に804票だった得票数は、翌7日には3,950票に増加し、これ以降の得票も6日以前より大幅に伸びていることが表3から確認される。こうした得票数の増加は、保勝会の結成に伴う本格的な運動の開始が反映されたものと考えて良いだろう。日本新八景の選定というイベントに対し、松江市は市を挙げた投票動員体制を創りあげたわけである。

保勝会の宣伝活動はこれ以降熱を帯びてくる。9日に開かれた協議会では、宍道湖周辺の「玉湯今市直江庄原平田大社秋鹿等の主要町村」にも投票の応援を呼びかけることが決議され、湖北の町村は市役所が、湖南の町村は商工会議所が、それぞれ勧誘を受け持つこととなった。投票勧誘活動の範囲はその後八束・能義の両郡にも伸び、さらに県を超えた米子市にまで及んでいる。

投票の締切が近づくにつれ、松江市内の景観に変化が見られだした。保勝会は13日の午前11時から「宍道湖宣伝デー」なる企画を実行している。これは市内の自動車会社から寄付された12台の自動車に「市内各検査による粒揃いの芸者」数十名を分乗させ、楽隊を先頭に写真入り宣伝ビラ数万枚を散布しつつ市内を練り歩くというものであった。この自動車行列は、4日後の17日午後1時から、さらに19日の午後からも実施されている。また、投票数と順位を報道する紙面、および「宍道湖宣伝ポスター」が、保勝会の手によって市内外二十数カ所に貼りだされている。報道紙面は恐らく毎日張り替えられたのだ

ろう。ポスターのデザインは白地に赤文字で「愛すべき郷土のために」と描かれたものであった。街路には、「日本新八景へ宍道湖を投票して下さい」(ママ)と記された小旗を取り付けた人力車と営業用自動車が疾走する。小旗は保勝会が準備したものであったという。

5月18日付の紙面には、保勝会の様子を撮影した写真が掲載されている(図1)。



図1 宍道湖保勝会内の様子

机や棚の上には葉書が積み上げられ、壁には宣伝ポスターが掲示されていることを確認できる。

日本新八景選定への個人レベルでの参加の様子については明らかでない部分が多いが、当時松江に住まう人々は、少なくともこの企画の存在については、何らかの形で目にしたり耳にしたりしていた可能性は高いといえるだろう。こうした宣伝活動は投票締切日の20日に最も盛り上がったものと推測される。

宍道湖投票最後の日である二十日は松江市民の熱烈ぶりはひとしほ際立ち紙上に発表された十七日正午までの整理数において宍道湖は前日より二位落ちて第五位となったのでこれが挽回に努め最後の五分間にヘビーをかけて第一位当選の初志を貫徹する保勝会委員達は必死となり市街を自動車で疾駆し投票を勧誘するのみならず市内中等学校、小学校生徒児童にも後援を頼み市役所内の保勝会事務所は戦場にもひとしい混雑振りを極め市民は朝配達された本紙を待受け順位と得票数を凝視しまだ五万台にうろついているのは手ぬるいとやきもきするものもあり委員は全く血眼になって活動して居た

(大阪毎日新聞山陰版：1927(昭和2)年5月21日付)

宍道湖投票最終日における宍道湖保勝会其の他の活動目覚ましく保勝会では市内各所に自動車をやって檄文を散布する傍ら鈴や笛、サイレンを鳴らしつつ市内限無く最後の活躍を続け委員や市会議員は自動車上から声を枯らして「もはや今夜十時までの投票で一切の運命は決る、愛すべき松江のために一枚の葉書を…」と辻々に叫び二十日夜の松江市内は近年になく緊張した

(大阪毎日新聞山陰版：1927(昭和2)年5月22日付)

ある程度の誇張は織り交ぜられていると思われるが、当日の喧噪が伝わる報道であろう。

投票最終日に配達された紙面には17日正午時点での整理票数が報道されていたが、このとき宍道湖の得票は58,024票、湖沼の部の第6位であった。しかし投票締切以降も票数は伸びて行き、最終的には70万票近くまでに達した。結果として湖沼の部で第4位となる票数を集めており、宍道湖は審査委員会での審議を経て「百景」に選ばれている。

## ii 美保ヶ関<sup>[1]</sup>

美保ヶ関に集められた244,397票は、県内では宍道湖に次ぐ得票数の多さであった。紙面への初登場は4月26日で、354票を集め海岸の部第19位に入り込んだ。以降得票数は増加するも順位は後退し、最終的には海岸の部の第38位という結果に落ち着いた。

美保ヶ関でも組織的な集票活動が確認されている。5月8日付の紙面には、美保ヶ関町では日本新八景選定が開始されて以降「この機会にわが美保ヶ関を是非とも海岸名勝地に当選せしめなければならぬ」という機運があがっており、その結果町役場に保勝会が設置された様子が報道されている。保勝会事務所には役場吏員や商工会員らが詰めかけ、総掛かりで葉書に「スタンプ押印」を行っていた。その結果、保勝会には8日の時点ですでに約10万枚の葉書が集まっていたという。12日には緊急町会が開かれ、「該問題に対し町は徹底的に援助」する旨が決議された。町を挙げて取り組むべき課題としてこのイベントが認識されたのである。美保ヶ関の得票数はこの時点で県内トップであり、町民を中心とした活動は早くから実施されていたものと推測される。投票数の推移を見る限り、その活動は締切当日まで続けられたものと思われる。

### iii 江川

江川の名が紙面に現れるのは遅かった。初登場は投票締切後の5月25日付の紙面であり、1,092票（12位）という得票数が確認される。しかし河川の部へエントリーされる候補地の少なさもあって、最終的には50,266票という得票数ながら同部門の第10位に入選を果たし、結果として「百景」にも選定された。

江川への投票をめぐる具体的な様子を伝える資料は確認できていないが、やはり組織的な集票活動が存在したと考えられよう。ただ、こうした活動を企図した主体については不明である。投票数の推移からは、企画の発表直後から投票運動が起こっていたわけではなく、むしろ締切日近くになって活動が開始された可能性を読み取ることができる。これは日々紙面に報道される得票経過のうち、河川の部が他部門よりも候補地・得票数ともに少なく、投票期間が残り僅かであっても、一定数の得票に達せば入選の可能性が高くなる点などが注目されたのかもしれない。

### iv その他の候補地

島根県内では上記3ヶ所のほか、断魚渓と出雲浦北海岸が1万票を超える得票を集めている。断魚渓は14,383票で渓谷の部第29位、出雲浦北海岸は11,785票で海岸の部第61位であった。いずれの候補地にも何らかの後援組織の存在が推測され、またその他の得票1万票以下の候補地に関しても小規模ながら同様の組織活動が存在していたものと思われるが、それを明らかとする資料を現時点では確認できていない。

なお、海岸の部と湖沼の部に「中ノ海」と「中海」がそれぞれ1票ずつ投票されていたことが確認される。あえて宍道湖との得票差を比較してみれば、この企画がいかに特定の場所を後援する団体の存在とその実践とによって成り立っていたのかが、浮き彫りとなるだろう。

### (3) イベントの受容—鳥取県内の候補地

#### V 浦富海岸<sup>[12]</sup>

鳥取県内の候補地の様子についても以下に明らかにしておきたい。これは島根県や松江市におけるイベントの受容の特性をより明確にする意味でも必要な作業であると思われる。本節では浦富海岸、三朝温泉、皆生温泉、岩井温泉について主に検討する。

鳥取県内の候補地で最も得票を集めたのが浦富海岸であった。4月17日付の紙面にわずか2票の票数が掲載されたのがその初登場であったが、日付が5月に変わるあたりから得票は増加し、最終的には675,905票を集めている。これは海岸の部で第19位に入る票数であり、審査の結果「百景」にも選定された。

浦富でもやはり組織的な集票活動が確認される。きっかけは浦富村村長および商工会長らが、浦富村の海岸を日本新八景選定の投票で「高位に占め天下に紹介しよう」と、「僅かなはがきの持寄り」を行ったことであった。その結果、村議会では4月中順の時点で早くも村を挙げ投票を実施することを決議した。栗村村長は「こんな好機会はまたとないでせうから一位ならずとも全力を尽くし全国で認められたいと考へています」と23日付の新聞にコメントを寄せている。さらに5月1日、同村で開かれた岩美郡教育会総会では、浦富を当選圏内に入るために郡を挙げて投票を実施するという建議が可決された。この結果、同郡教育会からは1,000枚、郡の小学校教員全員から1,500枚、郡内に13ある小学校の生徒全員から一人一枚にあたる約6,000枚の葉書を浦富村へ寄付させることが決定された。

5月13日付の新聞に浦富海岸が部門29位まで後退していることが報道されると、関係者らは「浦富の荒廃はこの一週間にあり」という掛け声のもと、近隣の鳥取市へ投票を呼びかける戸別訪問を開始している。村役場には「日本新八景投票期日切迫郷土愛を以て必勝を期せよ」と墨書きされた看板が立てられ、商工会や青年団らは幟を立てた自転車で村内を駆け回り、投票の勧誘を行った。投票用の葉書の代金に

については、たとえば「浦富村桶屋沢田政蔵君の如きは極度の郷土愛から好きな酒も辞め財布をはたいて一日に一円六十銭をはがき代として寄付した」という話のように個人的な寄付が確認される一方で、「16日には浦富村各区の基本財産が投票用葉書の代金として使用されることに決定した」という話も確認される。まさに村および郡の威信をかけた運動が展開されていたわけである。

## VI 三朝温泉<sup>(13)</sup>

三朝温泉は4月25日付の紙面で温泉の部第2位として初登場した。以降も継続的に得票を続け、順位も常に上位をキープしつつ、最終的に570,356票を集め部門中第5位の成績を残している。

5月8日付の紙面から、地元三朝村での運動の過程を辿ってみよう。4月15日に同村の医師が温泉協会に10枚の葉書を持参したのが始まりであった。21日には協会に「日本新八景三朝応募事務所」が開設され、「举村一致」の運動が開始されたという。

投票の呼びかけは三朝村内に留まらない。村は「隣接の倉吉町に於ても三朝温泉の盛衰は直接に關係ある」という理由をつけ、隣接する倉吉町への投票勧誘を開始した。これは当時、山陰本線より分岐する倉吉線の倉吉駅が三朝温泉への最寄り駅であったことも関係しているのだろう<sup>(14)</sup>。倉吉町はこの求めに応じたらしく、町と商工会の有力者らが後援会を結成し、「目下盛んに運動」を実施していることが報道されている。

三朝温泉では、「各旅館の女中さん」、「芸妓各検番」、「浴客」、あるいは「荷馬車曳くもの」から葉書やその購入代金の寄付が相次ぎ、「応募事務所では連日五六名の事務員が葉書の発送などで大車輪のありさま」であった。さらに、寄付者名とその寄付の内容とが、事務所の壁に大きく貼り出されていた（図2）。イベント当時、新聞社は連日各地方の住民による葉書投票や集票活動を、「郷土愛の発露」、「涙ぐましい愛郷心」などと報道し、地域の運動を煽り立てていた。この企画に“乗った”地方（あるいは各々の主体）にとっては、新聞で報道される候補地の順位差それ自体が、候補地ごとの「愛郷心の差」と読み替えられていたことは十分に考えられる。得票＝愛郷心というコードのもとにおいて、三朝温泉の事務所に貼りだされた葉書寄付者の一覧表は、地域の構成員に対して、「愛郷心」を有す／有さないのは誰であるのかを可視化させるシステムとして機能していたと思われる。



図2 貼り出された寄付者名の一覧

期間中三朝温泉は上位を維持し、その名はほぼ毎日全国紙上に大文字で掲載された。「同村は業務も放任し」、「寝食を忘れて血のにじむような最後の猛運動」を行った。締切間近の16・17日に開催された東伯郡教育会総会では、浦富海岸を推す岩美郡教育会と同様に、三朝温泉への投票の斡旋が可決された。こちらは郡内の小学校生徒から葉書2枚の寄付を実施させることが申し合わされている。

運動の甲斐もあって第5位に入選、三朝温泉は審査委員会の審議を経て「百景」に選定されている。

## VII 皆生温泉<sup>(15)</sup>

皆生温泉は温泉の部で第16位となる284,308票を集めている。初登場は三朝温泉より1日遅れの4月26日付の紙面であった。5月9日付および11日付の紙面

では部門中4位まで昇り詰めている。以降は順位を落とし紙面にその名が見えなくなるときもあったが、最終的には部門中16位に収まった。

皆生温泉では、旅館・料理屋業者を中心として保勝会が結成されている。部門中4位を占めたことが報道された9日には「地元の人もいよいよ熱狂」、「各種の団体や個人でその熱心さに動かされて投票する者続出」という状況であった。米子電車軌道、皆生温泉土地会社も投票を後押しした。米子市長も吏員2名を市内の有力者や銀行へ派遣し、投票の勧誘に当たらせたという。投票締切が近づくと、「未明から役員総出で米子市内および付近町村の個別訪問をして投票の勧誘」が実施され、周辺の各村や米子在住の鉄道職員による組織票も保勝会に持参されたことなどが報道されている。

### VIII 岩井温泉<sup>(16)</sup>

岩井温泉は初登場こそ先の三朝・皆生温泉よりも出遅れるものの、その後得票数と順位を一気に上昇させ、最終的な得票数を254, 582票とし、温泉の部の19位を占めるに至った。5月終盤には皆生温泉と票数を争い、2日間ほど順位を追い抜いていたことも確認される。

運動の組織化は他の候補地よりも遅れたようで、初めて岩井温泉の様子が報道されたのは5月18日付の紙面上であった。旅館組合が投票事務所の役割を果たしており、ここでも「举村一致」の投票運動がみられた。「芸妓や女中達はチップを葉書代に投げだし同村小学校生徒等は零細な小遣錢を集めて葉書代にするなど郷土愛の美しい発露があつて火の出るやうな猛烈な活動を続けて居る」。

### IX その他の候補地

鳥取県内で1万票以上の得票を集めた候補地は、上記4ヶ所のほかに、関金温泉と千丈ヶ滝が確認される。関金温泉の初登場は5月25日付の紙面で、最終的に47, 253票を集め温泉の部の第26位を獲得した。千丈ヶ滝は現在の東伯郡琴浦町船上山の山腹に立地する滝であり、紙面への初登場は関金温泉と同じ25日付で、最終的に瀑布の部で第18位となる22, 343票を集めていることが確認される。得票数からはいずれの候補地でも集票活動が行われていたことが考えられるが、今のところ運動を伝えたり報じたりする資料を見つけていない。

#### (4) 大山の「百景」入選をめぐって

山陰地方において1万票以上の得票を集めた候補地を表3に掲げているが、得票数3, 230票の大山も取りあげている。大山の得票数は山岳の部で第37位という成績であった。

この候補地が「百景」に選定されていることに注目したい。山陰地方で「百景」に選定されたのは、大山を含めて5ヶ所であった。それぞれの得票数と部門中順位を示すと次の通りである。宍道湖(684, 018票／4位)、江川(50, 266票／10位)、浦富海岸(675, 905票／19位)、三朝温泉(570, 356票／5位)。大山の得票数と部門中順位は、これらの候補地の得票数と順位よりも、明らかに少ないこと、そして低いことが指摘できるだろう。

この点について、そもそも「八景」「二十五勝」「百景」がどのような過程で選定されたのかを詳しくみておこう。まず、6月5日付の紙面上において、日本新八景の候補地80ヶ所が公表された。これら80ヶ所は、各8部門のうち、得票数の多い順に、それぞれ第1位から第10位までの候補地を選択したものであった。湖沼の部第4位の宍道湖、河川の部第10位の江川、温泉の部第5位の三朝温泉は、このとき八景候補地として選び出されたことになる。次いで、6月11日に開かれた第1回審査委員会の場において、新たに53ヶ所の候補地が選び出された。海岸の部で第19位であった浦富海岸も、この53ヶ所に含まれていた。

これで選び出された候補地の合計は133ヶ所となり、これらが「八景」「二十五勝」「百景」のいずれかに割り振られることとなったのである。

さて、6月11日の審査員委員会で決定された53の候補地に注目してみたい。これらの候補地は、それ以外の80ヶ所が得票数の多さによって決定されていたのとは異なり、審査委員会で決定された審査基準にもとづいて選定が行われた。審査基準は資料3に挙げているとおりである。そして、すでに白幡(1992)や荒山(2003)が指摘しているとおり、この審査基準は、同時期に準備中であった国立公園の選定基準と酷似しているのである<sup>(17)</sup>。また、審査委員のなかには、後に国立公園の選定に大きく関わる専門家らが複数名含まれていたことにも注意しておきたい<sup>(18)</sup>。さらに表4に掲げるとおり、この当時公表されていた国立公園候補地の16ヶ所およびその計画範囲に立地する風景地は、阿寒湖を除いていずれも「八景」「二十五勝」「百景」に選定されている点も興味深い。

133ヶ所の選定にはかかる経緯があったから、たとえば部門中得票数第1位の候補地が、必ずしも「八景」に選ばれたわけではなかった。渓谷の部で「八景」に選ばれた上高地は得票数第11位であり、瀑布の部で「八景」に選ばれた華厳滝は第9位であった。これは「二十五勝」や「百景」に選定された候補地にもあてはまるであることであり、なかには他の候補地と比べ圧倒的に得票数が少ないにもかかわらず、選定された候補地も存在した。荒山(2003)は、「二十五勝」「百景」に選ばれた候補地のうち、以下にあげる場所が得票数1万票以下であったことを明らかにしている。「二十五勝」では箱根温泉(187票／43位)、

### 資料3 国立公園の選定基準と八景・二十五勝・百景候補地の審査基準

#### 国立公園の選定基準

##### 必要条件

我が国の風景を代表するに足る自然の大風景たること

即ち国民的興味を繋ぎ得て探勝者に対しては日常体験し難き感激を与ふるが如き傑出した大風景地にして海外にも誇示するに足り世界の観光客を誘致するの魅力たるもの

- (1) 同一形式の風景を代表して傑出せること
- (2) 自然風景地にして其の区画大なること
- (3) 地形地貌が雄大なるか或は風景が変化に富みて美なること

##### 副次条件

- (1) 自然的素質が保健的にして多数の利用に適することなること即ち空気、日光、気候、土地、水等の自然的素質が保健的にして多数の登山、探勝、探索、散策、釣魚、温泉浴、野営、宿泊等の利用に適すること
- (2) 寺社仏閣、史蹟、名勝天然記念物、自然現象等教化上の資料に豊富なること
- (3) 土地所有関係が公園設置に便宜なること
- (4) 位置が公衆の利用上有利なること
- (5) 水力電気、農業、林業、牧畜、水産、鉱業等各種産業と風致との抵触少なきこと
- (6) 既設公園の施設が国立公園計画上有効に利用せらるるものとなると共に将来の開発容易にして国立公園事業の執行上便宜多きこと

(「国立公園ノ選定ニ關スル方針」(1931)より引用。送り仮名をカタカナからひらがなへ変更した。)

#### 八景・二十五勝・百景候補地の審査基準

- (1) 規模の大なること
- (2) 景種の多種多様なること
- (3) 四季各特色あること
- (4) 交通の便利なること
- (5) 史実の感興をひき若くは天然記念物のあること
- (6) 民衆的施設あることおよび将来施設可能なること
- (7) 地理的分布を考慮すること

▲温泉については特に左の条項を参照すること (イ) 湧出量 (ロ) 泉質

(大阪毎日新聞1927(昭和1)年6月13日付より引用。)

表4 国立公園候補地と日本新八景・二十五勝・百景との関係

国立公園候補地	日本新八景・二十五勝・百景		
	八 景	二十五勝	百 景
阿寒			
登別			登別温泉(41, 086／27位)
大沼		大沼(466, 234／6位)	
十和田湖	十和田湖(734, 111／3位)		
磐梯及吾妻			猪苗代湖(40, 518／13位)
日光	華厳滝(214, 381／9位)		中禅寺湖(22, 582／14位)
富士		富士五湖(1, 328, 978／1位)	
		箱根温泉(187／43位)	
上高地	上高地渓谷(606, 391／11位)		
白馬岳		白馬山(207, 891／21位)	
立山		立山(66, 363／28位)	
		黒部渓谷(822, 639／8位)	
大台ヶ原及大峰山		瀧八丁(2, 064, 590／3位)	
		那智の滝(74, 308／13位)	
大山			大山(3, 230／37位)
小豆島及屋島		屋島(1, 034, 638／11位)	
阿蘇		阿蘇山(555, 934／6位)	
雲仙	温泉岳(3, 818, 721／1位)		
霧島			霧島(392, 844／13位)

注) 大阪毎日新聞1927(昭和2)年6月10日付より作成。八景・二十五勝・百景横の( )中の数字は、左が得票数、右が部門中順位。

大和平原(7801票／18位)の2ヶ所、「百景」では富士川(1736票／16位)、大歩危小歩危(95票／38位)、大山(3230票／37位)の3ヶ所である。そして、このうち箱根温泉と大山の2ヶ所は、この当時国立公園候補地としてノミネートされていた16の候補地の計画範囲に含まれる場所でもあったのである。

大山がその得票数の相対的な少なさにも関わらず「百景」に選定されたことについては、審査委員会の場において何らかの意向が働いていたことが想定されよう。日本新八景選定と国立公園選定の近接性、当時大山が国立公園候補地の16ヶ所のひとつであった点などからは、そこには国立公園選定をめぐる力関係の交錯が関係していた可能性が高いように思われる。

##### (5) 候補地と得票のあいだ

本章の(2)節および(3)節において、山陰地方におけるイベントの受容の様相を具体的に確認してきた。本節では、それぞれの候補地について確認される大量の得票は、一体誰によって投票されたものなのかを改めて考えてみたい。

まず、大量の得票が確認されたそれぞれの候補地では、投票を後押しする後援組織が結成されていたこと、こうした組織は地元の人々、商工会、あるいは地方自治体の職員らによって構成されていたことは、さきに見てきた通りである。また、地方の郡庁や各種団体らがこれらの組織を後押しした場合もあった。投票に用いる葉書については、個別事例の検討が必要ではあるだろうが、個人あるいは団体での購入・寄付によって集められていたことが想定される<sup>19</sup>。いずれにせよ、大量の得票は、まず候補地周辺の市町村あるいは集落単位で結成された各種団体によってもたらされていたことは明らかであろう。

また、近藤(2011)の指摘にあるように、ローカルな団体の組織票に埋没する形で可視化が困難となつた、組織外の個人票の存在も想定されるだろう。たとえば、投票締切日の松江市の街頭で聞かれた「愛

すべき松江のために一枚の葉書を…」という叫びは、一体誰に向かって投げかけられていたのか。資料の制約から断言することはできないが、投票の締切が近づくにつれ、周囲の状況や新聞報道に影響された個人による投票は、やはり一定数存在したものと思われる。

こうした候補地ごとに組織されたローカルな後援会による運動、および可視化が困難となった組織外の個人による投票の他にも、特定の候補地への集票活動が行われる場合があった。それは大都市圏に住まう地方出身者による、出身地方の候補地への投票である。この場合は、当時各都市に組織されていた県人会が、集票活動を担うことが多かった。

宍道湖への投票運動を事例として、大都市圏における集票活動の具体的な様子について詳しくみてゆくことにしよう<sup>(20)</sup>。5月16日付の大坂毎日新聞山陰版紙面には、「大阪における島根県人会の熱狂的声援振はめざましいものがある」という文面が確認されるとともに、松江市の雨森勧業主任が大阪島根県人会への投票打合せのため15日夜松江を出発したことが報道されている。17日に帰着した彼は、同日開催された市会において大阪島根県人会が「率先して二十万枚の投票を快諾」したことを報告した。このほかにも、「東京、仙台、新潟、静岡、熊本、小倉、佐世保などの県外における人々から十九日までに二十万枚の申込みあり東京の松平伯爵からは二万枚の申出」があったという。投票締切日の20日には、東京の島根県人会からは「取あえず十万枚投票した最高百万枚の見込保勝会の健闘を祈る」、朝鮮半島の京城島根県人会からは「二十万枚投票した保勝会の奮闘を祈る」といった電報が、保勝会に続々寄せられていた。これらの報道からは、大都市圏に住まう地方出身者らによる宍道湖への集票活動が、各地に複数存在していたことが伺われる。このことは一方で、松江市内においても、各府県の県人会による活動がみられた可能性を示唆している。

各地の県人会が実際どれほどの票を集めたのかは不明な点が多いけれども、宍道湖への集票活動については、松江市周辺にとどまらず、複数の都市にまたがって展開していたことは明らかであろう。こうした都市部の地方出身者や県人会による集票活動は、山陰地方の候補地では、美保ヶ関、浦富海岸、三朝温泉、皆生温泉についても存在していたことが新聞報道から確認される。大量の得票を集めた候補地についていえば、集票は地方と都市部の共同作業によって成り立っていた可能性を指摘できるのである<sup>(21)</sup>。

### 3. 投票運動がもたらしたもの－島根県松江市の場合

#### (1) 宍道湖への視線

前章で山陰地方各地における日本新八景選定への参加の様子を明らかにしてきた。ここからは、このイベントを通してそれぞれの場所はどのように語られたのか、その語りは現実の世界にどのような影響をもたらしていたのか、特に宍道湖への投票運動が確認された島根県松江市を事例として検討していきたい。

前章(2)節 i で見てきたように、宍道湖への集票活動を主に担っていたのは、市役所に設置された「宍道湖保勝会」という団体であった。そもそもこの団体はどのような動機をもって結成されたのであったか。当時の新聞報道によれば、その目的は「お国自慢の宍道湖を是非とも日本新八景の湖沼の部第一に当選せしめる」ことであったという。

日本新八景の選定という企画は単なる風景地の得票数争いではなかった。資料1にみると、「八景」に選定された候補地については、「鉄道省において公認し種々の方法によって永くこれを紹介す」、「入選八景地に文士と画家を派しその紀行文並にスケッチを東京日日、大阪毎日両紙上に連載する」というように、国家や大手新聞社による宣伝や報道、そしてお墨付きが与えられることが約束されていた。宍道

湖を「湖沼の部第一に当選せしめる」ため保勝会が結成され投票が組織化されるに至った背景には、この企画を「我郷土美を天下に宣揚する絶好の機会」と捉える視線が介在していたことを押さえておく必要がある。

こうした意識は企画開始以降様々な場面で表出している。一例として、当時の島根県知事森岡二朗が紙面に寄せたコメントを引用しよう。

日本新八景の選定に当たり我島根県において是非とも当選せしめなければならぬのはなんといつても宍道湖である、大橋川東方遙かに見ゆ出雲富士即ち伯耆大山のあの秀麗な姿夕陽を受けて真帆片帆にゆれつつ湖心をはしる小舟の眺めは天下の絶景でなければならぬ、第二は出雲浦の海岸線である、出雲赤壁、加賀の潜戸はいふに及ばずあの付近一帯の景勝は従来名所として知らるる何処の海岸にも劣らぬ優れたものである、第三は江川である、遠く広島県に發し重層たる四国の大山脈をぬうて日本海に注ぐまでのあいだには木曽、天竜にもまさる景勝が少なくない、私は郷土の人々がこの与えられた絶好の機会をとらへて天与の自然美を広く天下に紹介すべく努力せんと望むものである

(大阪毎日新聞山陰版：1927(昭和2)年5月1日付)

森岡の発言の趣旨は、日本新八景選定という「絶好の機会」を利用して、島根県内の「天与の自然美を広く天下に紹介」するために、「郷土の人々」は「努力」するべきだというものである。どういった根拠があるのかは不明であるが、特に宍道湖・出雲浦の海岸線・江川に関しては、「島根県において是非とも当選せしめなければならぬ」という。ここでいう「努力」とはもちろん葉書の投票を意味しているのであるが、このコメントが報道された直後に宍道湖保勝会が結成されていることは興味深い。いずれにせよ、県知事がこの企画を県内の「天与の自然美」を「広く天下に紹介」する機会であると捉えていたことは、日本新八景選定と松江との関係を考えるうえで象徴的である。

また、当時一般大衆のあいだで勃興しつつあったツーリズムとの関係も検討しておく必要がある。1920年代以降普及しつつあった旅行趣味は、同時期の登山、海水浴、スキーなどの屋外型レクリエーションの流行とあわせ、自然の風景地を目的地としたツーリズムとして現出しつつあった。ツーリズムの文脈においては、ある場所に付与されたオーセンティシティは、無数の目的地のなかでオーセンティックな経験を得られる場所はどこなのかをツーリストに指示す指標として働くこととなる。日本新八景の選定というイベントに「乗った」各地方は、このイベントをかかるお墨付きを得ることのできる機会として捉えていた可能性があることに注意したい。

この点については、宍道湖への組織的投票に携わった保勝会関係者らのコメントから伺うことができる。6月5日付の紙面において各候補地の得票数と順位が公表されると、宍道湖の得票は湖沼の部で第4位を占めるものであったことが明らかになった。この結果を受け、投票の組織化に尽力した関係者らは、表5中に掲げたコメントを残している。彼らはこの企画によって宍道湖が大量の得票を得たことを喜び、投票に協力した県民市民へ感謝の言葉を述べる一方で、これを契機として遊覧客の誘致を図り、地域の振興を目論みたいという期待をその言葉の端々に浮かべていた。彼らの思惑と希望的観測とが入り交じった主張は次のようなものであった。曰く、企画を通して宍道湖の名が全国に知れ渡ったのだから、全国から湖を目指して遊覧客が訪れるだろう。彼ら彼女らを満足させる施設を宍道湖畔や市内において整備していくことが、結果として松江市の振興や繁栄に結びつく。こうした地域の宣伝と開発に係る活動を興してゆくことが、「地方文化の発揚に資する」ことになるのであると。

表5 投票結果発表後における宍道湖保勝会関係者らのコメント

島根県 間宮学務部長	山陰道の誇りである山紫水明の宍道湖と中国地方の巨流江川が何れも有力な候補地と選定せられなほ県下のためまことに喜ばしいことでかかる機会に他地方へ紹介して大に他府県人の来県を求めて地方文化の発揚に資するところあらしめたい
松江市 高橋市長	松江市民はもとよりあまねく島根県民の援助によって宍道湖が第四位を勝ち得たことは最も密接の関係ある松江市の歓喜に堪えない處でこの上は遊覧者をしてゆっくり遊覧せしめるやうに施設したいこの意味で工業の發展湖岸に温泉地帯を設けるなどはまことに当を得た策と考えて居る、殊に保勝といふ意味を一層大きく愛郷心へ訴へて宍道湖の発揚宣伝に努めたいと思ふ
松江市 雨森勸業課主任	我らの宍道湖が第四位を勝ち得たことは皆様の未曾有の献身的努力によつた賜と感謝に堪へない次第ですわれわれは必ずしも第一を占めんとしたものでなく要は誇るべき郷土美をあまねく天下に紹介して一人でも天下の名士を集め共に絶景を讃美したいと念じたがためであつてつまりは松江市其他湖畔の繁栄を興すことになる考へるのでこれによって一層刺激を大にし保勝会の活動を広めてあくまで郷土の発展に尽くしたいと思ひます
松江市 山元商工会議所会頭	実は第四位の報を得て、非常に喚起した次第でこれひとへに市民の熱烈な愛郷心の賜物と感謝に堪えない次第ですが必ずしも等位を争ふのではなく要是山紫にして水明なこの宍道湖をあまねく天下に紹介してその存在を知つて欲しいのが私共の初恋であったのです、この上はたとへ選に漏れても決して失望するものではありません、この喜びはひとり松江市民のみが湖畔各地の喜びに堪えないところです今後他府県の人々が湖を指して遊覧に来て松江に滞在しその真価に触れるとき商工会振興上にとって大きな刺激となること信じます
松江市 園山市議会議員	この機会に松江市民の覚醒を促したい何事によらず松江市はまだ封建的で市の発展はよほど妨げられているこの際城山一帯は松平家から譲り受けて一大公園とし興雲閣のごときはいつまでも芸者入るべからずでなく遊覧に來た人々に十分の満足を与え全国的に有名な茶室菅原庵明々庵の如きも訪ねる人の利便を計つて湖岸との連絡を一層便利にし湖畔遊覧公園として新たに乃木村地先の埋立をなして新公園とし洗合地方にも同じく遊覧設備を作りたい

注) 大阪毎日新聞山陰版1927(昭和2)年6月7日付紙面より作成。

地域社会における日本新八景選定という企画への積極的な参加は、自分たちの地域を宣揚することへの希求と、権威による承認欲求とによって引き起こされていたといえるが、かかる希求は企画終了後すぐに消えたわけではなく、地域に残されたものと思われる。そうした意識は、畢竟投票の対象となつた特定の風景へと向けられることとなつた。イベントが終了して以降も宍道湖をめぐる様々な振興策が紙面を賑わせてゆく。わかりやすいものとして、1928(昭和3)年1月7日から18日にかけて掲載された、「宍道湖の新研究」と題された連載記事を挙げておこう。これは松江市の行政関係者・専門家・有力者ら10人が宍道湖の活用策を論じるというものであった。各人の論題については表6を参照されたい。多くの論者に共通しているのが、宍道湖をある種の資源としてみなす眼差しであろう。ここでもやはり、遊覧客の誘致を主張する論者を複数確認することができる。

日本新八景選定という企画を通して、投票の対象となつた宍道湖にある眼差しが向けられるようになつてゐることが伺えるだろう。それは企画以降様々な場面で見受けられるようになった、ある種の言説に反映されている。すなわち、宍道湖という自然環境をインフラストラクチャーとみなし、これを整備(宣伝・開発)してゆくことによって、収益の見込める産業(観光業)を発展させるべきだという語

表6 連載記事「宍道湖の新研究」の筆者と論題

氏名と当時の役職	報道された論題	紙面掲載日
松坂龍雄(島根県商工水産課長)	八十万円の年収を挙げたい	1月7日
太田直行(松江商工会議所書記長)	ゼネヴァのやうな遊覧地にしたい	1月9日
山岸安二(斐伊川改修事務所長)	斐伊川を掘った土を利用する者はないか	1月10日
福田源治郎(松江市助役)	天恵を利用して地上の楽園にしたい	1月11日
林直樹(島根県耕地整理課主任)	湖岸を埋立て大いに活用したい	1月12日
野津左馬之助(島根県史編纂委員)	三百年もすれば湖水は埋るとの説	1月13日
中島清次郎(合同汽船常務取締役)	年々湖が浅くなり浚渫がしてほしい	1月14日
板井賛次郎(勧業銀行松江支店長)	阪神地方と松江と結ぶ方法を講じたい	1月15日
西谷亀之助(山陰松江水産取締役社長)	佐陀川を改修して惠曇と松江を結べ	1月17日
錦織末富(県立松江病院長)	遊覧都市としての衛生施設を完備せよ	1月18日

注) 大阪毎日新聞山陰版1928(昭和3)年1月7日付から18日付紙面より作成。

りである。

この語りが現実世界の諸関係の構築と密接に関わってゆく様相を、最後に確認しておこう。

## (2) 保勝会の系譜と観光行政

松江商工会議所に毎月1回関係者が集まり、観光による松江の振興を話し合う協議会が開かれるようになったのは、日本新八景選定の翌年、1928（昭和3）年3月のことであった。協議会に集まった顔ぶれは、松江市産業課長、商工会議所事務局員、国鉄松江駅長、一畑電鉄北松江駅長、合同汽船支配人、旅館組合の代表者たちである（高橋編1967；146）。協議会の開催を呼びかけたのは、この当時商工会議所の理事を務めていた太田直行（1890-1984）という人物であった<sup>22)</sup>。

彼がこの協議会を主催した理由は、「松江市は地勢其他の関係上近代的工業には適せぬが風光明媚な点に於ては全国屈指の天恵を有するので、本市将来の発展上観光施設を完備する事は絶対に必要」（梶野編、太田著 1987；199）というものであったが、これは日本新八景選定をきっかけとして頻繁に見られだした、宍道湖を積極的に観光資源化しようとする言説を踏襲するものである。彼は1928（昭和3）年1月9日付の大坂毎日新聞山陰版紙上に「ゼネヴァのような遊覧地としたい」と題する論説を発表しているが（表6を参照）、ここでも「大松江市としての宍道湖利用は日本のゼネヴァたらしめる外に良策がない」と同様の主張を行っており、宍道湖を宣揚する方策を探っていたものと思われる。

太田が主催したこの協議会は、前年の日本新八景選定の際に組織された宍道湖保勝会の系譜を引き継いだものであると思われる。日本新八景選定当時、保勝会の結成を後押ししてその活動を担ったのは、松江市と松江商工会議所であった。太田は企画当時商工会議所の書記長という役職にあったから、保勝会の運営に大きく携わっていたものと思われる。大量の葉書の確保および印刷といった業務を遂行するには、相応の人材と財源が求められたことだろう。企画が終了してしまえば用が無くなる団体ではあったが、そこで培われたネットワーク、経験、運営のノウハウなどが、そのまま消滅してしまったとは考えにくい。協議会に集まった企業や団体の関係者らは、恐らく日本新八景の際に一定数の葉書投票を保勝会より依頼されていたものと思われる。関係者のあいだに共有されたある程度の実績を伴う経験、企画のあとに残された地域宣揚への希求は、かつて運動と共に担い、宍道湖の活用を語る太田の呼びかけに対し、それほど悪い反応を示すことは無かつたはずである。

この協議会での議論は、のちに水郷祭という景観を松江に現出させている<sup>23)</sup>。日本新八景選定以来計画されてきた宍道湖の宣揚策は、協議会での議論を通して高まる「夏の宍道湖を活用して水郷情緒を強調しなくてはならぬ」という意気込みのもとで具体性を帶び、1928（昭和3）年夏の「煙火大会」を経て、翌年以降執り行われる「水郷祭」へと結実したのである。

協議会はその後も継続して開かれ、結果として「県市其他の各観光協会を生む機縁」（梶野編、太田著 1987；199）もつくりだすことになった。同時期の国内外におけるツーリズムの隆盛もあり、島根県は1930（昭和5）年4月2日に「島根観光協会」を立ち上げている（大阪毎日新聞山陰版；1930年4月5日付）<sup>24)</sup>。図3に掲げた設立趣旨書には、協会設立の目的は「本県の地理交通物産其の他の状況を紹介し且旅行巡遊に関する施設の改善を勧奨し来遊者の便宜を図る」ことであると記されている。総裁に島根県知事、会長に県内務部長を据え、「松江、大社、美保関、一畑、玉造などの関係者」や「県内の商工会議所、商工会、旅館業組合、運輸業者その他外客誘致に密接な関係あるもの」が会員とされたようである。今日につながる松江の観光に行政が本格的に取り組み出したのは、この島根観光協会の設立が嚆矢であったと思われる。

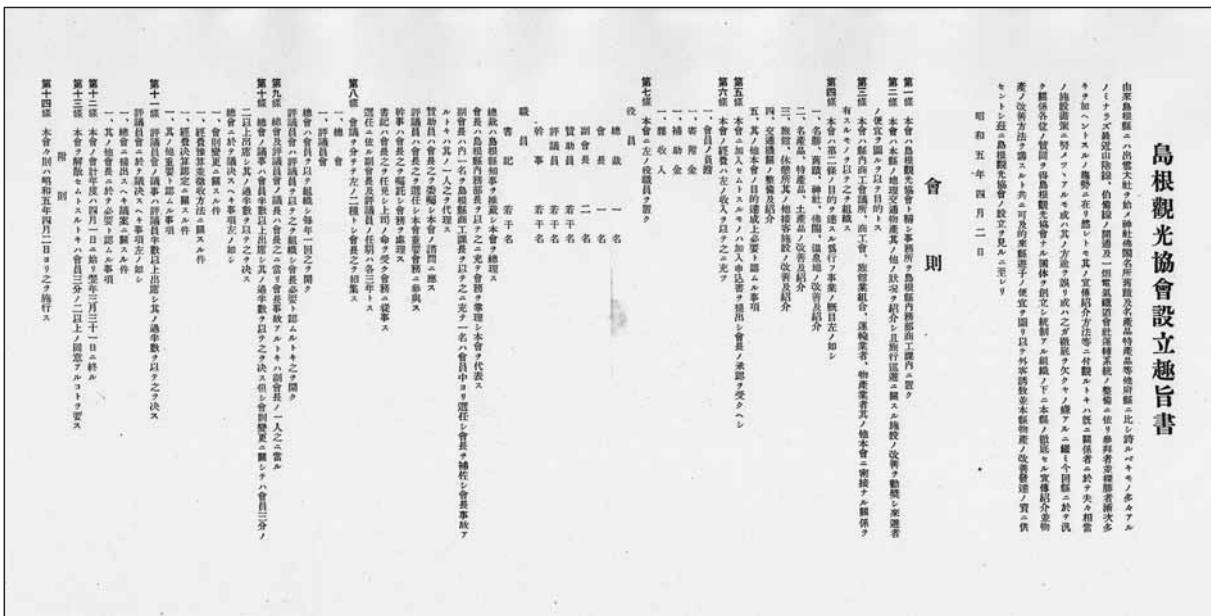


図3 島根觀光協會設立趣旨書(1930)

### まとめにかえて

美術史家のW. J. T. Mitchellは、風景を単に見られる対象や語られるテクストなど静的な対象と捉えるのではなく、動的なプロセスとして一彼の言葉を用いれば、文化的実践として捉えることを主張している。場所を表象する技法としての風景が、いかなる意味作用実践の場として作動し、いかなる社会的機能を有しながら流通するのかを検証する必要があるという (W. J. T. Mitchell 2002)。Mitchellの主張する文化的実践としての風景という視点は、場所と表象の関係を考えるうえで示唆的であるし、本稿で取り扱った事項についてもそれは同様である。1927 (昭和2) 年に実施された日本新八景の選定というイベントは、各地で種別的な“風景”が仕立てあげられるひとつの契機であったと理解することができるからである。

本研究で明らかとなった成果をまとめると以下の通りとなる。日本新八景の選定というイベントに対し、山陰地方において多くの反応が見られたことが明らかになった。松江市の事例から検討した通り、そこには、自分たちの地域を全国的に知らしめ、「八景」入選や全国紙上での報道を通して顕彰され、それを通して地域の振興をも図りたいという希求を見いだすことができる。同時期に国内外で隆盛しつつあったツーリズムへの意識もあり、かかる希求は観光による地域宣揚を目的とした実践へと結実する。葉書投票の組織化を目的として結成された宍道湖保勝会は、後の観光行政への布石となったのである。

検討が不十分な点も山積している。日本新八景選定と地域との関係についていえば、得票の少ない候補地や、このイベントへの反応を見せなかった地域での様子を、資料の再調査も含め検討する必要がある。

何より、松江や宍道湖という場所が、このイベント以前（そして以後）にどのように表象されてきた（いった）のか、場所表象の変遷への目配せが本稿では不十分である。冒頭で述べた課題とも関連するが、われわれの眼前に立ち現れる景観を脱-自然化し見定めてゆく作業、「場所の系譜学」(加藤2002;138)を辿る作業を積み重ねつつ、本稿で検討した事象を位置づける必要があろう。以上の点を今後の課題として稿を閉じることとする。

[付記] 日本新八景選定という興味深い出来事をご教示頂いた荒山正彦先生、松江の近代をめぐる

様々なエピソードをご教示頂いた有馬誉夫先生、論文執筆のお誘いを頂いた松江市文化財課史料編纂室の皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。皆様のご指導なくしてはこのような形での発表には至らなかつたであろうと思います。

## 注

- (1) むろん場所に付与される意味や価値は单一のものではなく、通時的にも共時的にも複相性を帶び、ときに矛盾をはらんでもいることに注意したい。
- (2) 特定のコンテクストにおいて構築される場所表象について、その技法やプロセスを問うこと、構築された場所表象と物理的空間の構築との関係性を問うこと、こうした弁証法的な作用の系譜を現在まで見通しながら、各個の事例の検証を行ってゆくことなどが、さしあたりの課題であろうか（ハーヴェイ1999、ジョンソン2000）。
- (3) 本稿で引用した新聞記事は、特に注記のない限り、全て1927（昭和2）年に発行された大阪毎日新聞本紙および同紙山陰版である。
- (4) 当時日本が植民地としていた地域の風景地への得票は確認されない（朝鮮半島、台湾、南洋諸島など）。また、沖縄県はこの当時「大阪毎日新聞」および「東京日々新聞」が購読されていなかった影響か、同県の風景地への得票も確認されない。
- (5) 審査員の顔ぶれは5月13日付、30日付の大阪毎日新聞紙上において公表された。全審査員とその肩書きについては、近藤（2011）に一覧化された表としてまとめられているので参照されたい（近藤2011；39）。
- (6) また、近年歴史系博物館において散見される近代ツーリズムをテーマとした企画展示に、このイベントを取りあげられる場合がある（江戸東京博物館編2005、滑川市立博物館編2012など）。
- (7) 川上は「日本百景 島根から宍道湖と江の川」と題する短文のなかで日本新八景の選定について触れ、島根県内から宍道湖と江の川が「百景」に選ばれたことを記述した。このことについて川上は、「いずれも水景美が選ばれているが、今の時代だったらどこが選ばれるか興味深い」（川上1994；79）というコメントを残しているが、このイベントにおける風景地の選定で大きな役割を果たしたのは、特定の場所を組織的に推薦する運動の存在とその実践とにあったはずであり、この点の説明と認識が欠落しているように思われる。
- (8) 公的な「歴史／物語」とは整合されず、排除や忘失にまかされる諸々の出来事をめぐる声や経験を、かつてその出来事が生じた状況のまま改めて拾い出してゆくことは、近年の“記憶”をめぐる議論の高まりとあわせ歴史地理学の課題として提示されつつある（大城2012）。“記憶”をめぐる議論と歴史地理学との接点については、ジョンソン（2000）、米家（2005）などが参考となる。
- (9) 島根県では24ヶ所の候補地に1,005,429票が、鳥取県は28ヶ所の候補地に1,858,667票が投じられている。荒山（2003）の分析方法に倣い島根鳥取両県の得票について考察を加えてみると、島根県では1万票以上を集めた5ヶ所の得票数が全得票数の99.9%を占め（1,004,849票）、鳥取県も得票1万票以上を集めた6ヶ所が全得票数の99.7%を占めていることが明らかとなった（1,854,819票）。なお、1927（昭和2）年当時の島根・鳥取両県の人口は、島根県が約729,400人、鳥取県が約481,900人であり、両県とも県の総人口以上の得票が集められていることがわかる（総務省統計局編2006）。
- (10) 宍道湖をめぐる得票運動の詳細および引用については以下の新聞記事を参考とした。大阪毎日新聞山陰版：1927（昭和2）年4月22日付、5月4日付、6日付、11日付、13日付、14日付、15日付、16日付、19日付、20日付、21日付、22日付。
- (11) 美保ヶ関をめぐる得票運動の詳細および引用については以下の新聞記事を参考とした。大阪毎日新聞山陰版：1927（昭和2）年5月8日付、14日付。
- (12) 浦富海岸をめぐる投票運動の詳細および引用については以下の新聞記事を参考とした。大阪毎日新聞山陰版：1927（昭和2）年4月23日付、5月4日付、11日付、19日付、20日付。
- (13) 三朝温泉をめぐる投票運動の詳細および引用については以下の新聞記事を参考とした。大阪毎日新聞山陰版：1927（昭和2）年5月8日付、13日付、19日付。
- (14) 倉吉線は1985（昭和60）年に廃止されている。なお、現在の山陰本線倉吉駅は1912（明治45）年より1972（昭和47）年まで駅名を上井駅といった。倉吉線倉吉駅は1972（昭和47）年以降駅名を打吹駅へと変更している。
- (15) 皆生温泉をめぐる投票運動の詳細および引用については以下の新聞記事を参考とした。大阪毎日新聞山陰

版：1927(昭和2)年5月11日付、18日付、20日付。

(16) 岩井温泉をめぐる投票運動の詳細および引用については以下の新聞記事を参考とした。大阪毎日新聞山陰版：1927(昭和2)年5月18日付、19日付。

(17) この審査基準に関し白幡(1992)は、「のちに国立公園の選定委員になった人たちが、将来の国立公園の設置、それにともなう観光を考えて用意してきた基準ではなかったか」と考察している(白幡1992;300)。

(18) 日本新八景選定の審査員のうち、後の国立公園の選定に大きく関与した人物は以下の通りである。本多静六(林学博士)、田村剛(林学博士)、脇水鉄五郎(理学博士)。このほか国立公園行政に関わる内務省関係者が複数審査員に含まれている。

(19) 後援団体の組織票という大枠の内部の位相については明らかでないところが多い。宍道湖を推す松江市の場合、5月16日の協議会において市会議員と商工会議所員は「各自一千枚以上の葉書を必ず引き受ける」ことが決議され、翌日には議員らに通達が送付されたという。また浦富海岸を推す浦富村においては、各区の基本財産が投票用葉書の代金として使用されたことは確認した通りである。これらの事例について、たとえば葉書やその購入代金を供出する各個人の感情は、必ずしも新聞が煽る「愛郷心」一色でなかったであろうことは想像に難くない。

(20) 大都市圏における宍道湖への投票をめぐる活動の様子は以下の新聞記事を参考とした。大阪毎日新聞山陰版：1927(昭和2)年5月16日付、19日付、20日付、21日付。

(21) 新田(2005、2010)は日本新八景の選定への人々の参加について、このイベントを地元の観光資源を宣伝する機会としてとらえ投票活動を展開した地方と、日々紙面に報道される候補地を「遊覧旅行」の事前情報として享受した都市部という構図を描きだしているが、こうした二項対立的な図式ではこのイベントへの参加の実態をとらえることはできないだろう。

(22) 太田直行は戦前から松江の振興に尽力した人物である。島根県における民芸運動の導入や水郷祭の創始などには、彼が大きく関わっている(太田1989)。

(23) 水郷祭の立案から実施までのいきさつについて、太田の自著や先行研究を参照しながら簡単に記述してみると以下の通りとなる。太田は毎年夏の天神祭を見るにつれ、「水郷松江の夏祭として単に陸上のみ賑はつても毫も湖上が顧られぬは頗る遺憾」であると感じており、協議会でも、「夏の宍道湖を活用して水郷情緒を強調しなくてはならぬ」と考えていた(梶野編、太田著1987;199)。たまたま俳句愛好団体が嫁ヶ島で納涼句会を行っているのを見かけた太田は、これに灯籠流しや花火を加えた「煙火大会」と称するイベントを企画し、1928(昭和3)年の夏に実施した。この企画が市民及び市当局から評判を呼び、翌1929(昭和4)年より松江市と商工会議所共催による「水郷祭」が実施されるようになった、というのがことの顛末である(太田編1934、松江まちづくりプロジェクト編1989)。

なお、“水郷”という語彙は大正後期から昭和初期にかけひろく一般に定着していったようである(岩本2001)。湖畔の生活を“水”をもって徹底的に美化(あるいは本質化)するこの語彙は、近代都市住民のツーリズム感覚によって生じたものであったといえる。宍道湖の観光資源化を企図していた太田は、ツーリストが期待する“水郷”という眼差しを見事に反復し活用したといえるだろう。

(24) 島根観光協会については有馬(2000)がその存在について記述を残しているが、この団体の設立に至るコンテキストはこれまで明らかにされていない。

## 参考文献

- 荒山正彦(2003)「風景のローカリズム—郷土をつくりあげる運動」、「郷土」研究会編『郷土—表象と実践』、嵯峨野書院、90-107頁。
- 有馬誉夫(2000)「島根観光連盟の歴史」、島根観光学会誌15、80-91頁。
- 岩本素白(2001、原著1934)「牛堀と長瀬」、池内紀編『素白先生の散歩』、みすず書房、3-21頁。
- 大城直樹(2012)「場所の系譜学再考—あるいは風景の別の読み方について」、歴史地理学54-1、30-38頁。
- 太田行人(1989)「柿葉 太田直行略伝」、梶野博文編、太田直行著『島根民藝録・出雲新風土記』、冬夏書房、393-396頁。
- 太田直行編(1934)『松江商工会議所四十年誌』、松江商工会議所、90頁。
- 梶野博文編、太田直行著(1987、原著1935・1939)『島根民藝録・出雲新風土記』、冬夏書房、399頁。

- 加藤政洋 (2002) 「都市空間の史層、花街の近代—ひとつの「場所の系譜学」へ向けて」、10+1 29、138–152頁。
- 川上誠一 (1994) 『しまね水の旅』、株プロジェクト、141頁。
- 米家泰作 (2005) 「歴史と場所—過去認識の歴史地理学」、史林88-1、126–158頁。
- 近藤浩二 (2011) 「メディア・イベントを見る昭和初期富山県の景勝地—「日本新八景」を素材に」、富山史壇164、35–32頁。
- ジョンソン, N. C. 著、上杉和央訳 (2001) 「現在の歴史地理」、グレアム, B.・ナッシュ, C. 編、米家泰作・上杉和央訳『モダニティの歴史地理 (下)』、古今書院、295–319頁。
- 白幡洋三郎 (1992) 「日本八景の誕生—昭和初期の日本人の風景観」、古川彰・大西行雄編『環境イメージ論—人間環境の重層的風景』弘文堂、277–307頁。
- 関戸明子 (2004) 「メディア・イベントと温泉—「国民新聞」主催「全国温泉十六佳選」をめぐって」、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編54、67–83頁。
- 総務省統計局編 (2006) 『新版日本長期統計総覧 第1巻』、日本統計協会、562頁。
- 高橋幸吉編 (1967) 『松江市商工会議所七十年誌』、松江市商工会議所、381、56頁。
- 東京都江戸東京博物館編 (2005) 『美しき日本一大正昭和の旅展』、東京都江戸東京博物館、197頁。
- 滑川市立博物館編 (2012) 『旅行時代の到来！—パノラマ地図と近代大衆旅行』、滑川市立博物館、67頁。
- 新田太郎 (2005) 「情報化する風景—「日本新八景」候補地の選定過程」、東京都江戸東京博物館編『美しき日本一大正昭和の旅展』、東京都江戸東京博物館、176–183頁。
- 新田太郎 (2010) 「「日本八景」の選定—1920年代の日本におけるメディア・イベントと観光」、慶應義塾大学アート・センター編『文化観光「観光」のリマスタリング』、慶應義塾大学、69–84頁。
- ハーヴェイ, D著、吉原直樹訳 (1999) 『ポストモダニティの条件』、青木書店、478頁。
- 松江まちづくりプロジェクト編 (1989) 『松江余談』、今井書店、251頁。
- ミッセル, W. J. T. 著、篠儀直子訳 (1997) 『帝国の風景』、10+1 9、149–169頁。
- Dubow, J. (2009) Representation. In Gregory, D. Johnston, R. Pratt, G. Watts, M. Whatmore, S. (eds), *The Dictionary of Human Geography 5<sup>th</sup> eds.* Wiley Blackwell, pp. 645–646.
- W. J. T. Mitchell. (2002) Preface to the Second Edition of Landscape and Power. In W. J. T. Mitchell (eds), *Landscape and Power 2<sup>nd</sup> eds.* The University of Chicago Press, pp. 7–12.

### 〈新聞記事〉

- 大阪毎日新聞本紙  
 「日本新八景の選定 各第一勝を募る」、大阪毎日新聞、1927(昭和2)年4月9日付。  
 「本社主催日本新八景選定総投票数一覧表 推薦された景勝一千四百七十」、大阪毎日新聞、1927(昭和2)年6月10日付。
- 大阪毎日新聞山陰版  
 「日本新八景投票で高点争いの宍道湖をわしが国さの名勝とこの際広く紹介せんと計画中」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年4月22日付。  
 「新八景の海岸に山陰松島を出さうと関係村挙って熱狂している」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年4月23日付。  
 「宍道湖を第一に出雲浦海岸や江川を当選させたい 森岡島根県知事談」、1927(昭和2)年5月1日付。  
 「浦富海岸を当選させようと 郡教育会は総会を開いてはがき寄付の申し合せをした」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月4日付。  
 「宍道湖を三位中に入選せしむべく 松江市は三日参事会を開き四日有力者を招いて具体案を協議」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月4日付。  
 「日本新八景投票 松江市を挙げお歴々奮起す」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月6日付。  
 「閔の五本松で世に知られている美保閔を入選させようと保勝会を設けて投票に熱狂せる美保閔町」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月8日付。  
 「選挙運動以上に村を挙げて 三朝温泉の投票に奔走」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月8日付。  
 「浦富の興廃はこの一週間にあり」、1927(昭和2)年5月11日付。  
 「九日附の紙上で一躍四位を占めた皆生温泉の地元では この機会にと熱狂して居る」、大阪毎日新聞山陰版、

1927(昭和2)年5月11日付。

「市役所と会議所が宍道湖推薦の勧誘者を各地に派遣して猛運動」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月11日付。

「宍道湖畔の絶景を讃美のあまり他府県人が投宿旅館を通じて投票用葉書を寄贈」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月13日付。

「火花散る三朝温泉の猛運動」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月13日付。

「自動車十二台に芸妓数十名を乗せ松江宍道湖保勝会がビラを撒いて大宣伝」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月14日付。

「美保関では緊急町会を開いて徹底的に援助し遊覧客のためいろいろの施設を決議」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月14日付。

「山陰には誇るべき名勝地が多い この機会に大宣伝が必要 土屋米子運輸所長が語る」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月15日付。

「いよいよ白熱した八景選び 宍道湖保勝会と在阪島根県人会の提携 郷土の大発展も一枚のハガキから」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月16日付。

「新八景選び必死の活動 女中はチップを投出し小学生はお小遣で 皆生温泉・岩井温泉」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月18日付。

「宍道湖の作戦熟す 市会まで開いた」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月19日付。

「新八景えらび 郷土愛高調-食を忘れ業を休む 最後の五分が重大だと血眼になった鳥取県民」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月19日付。

「愛郷の熱誠こめたはがき殺到『宍道湖を落すな!』と全国の県人奮ひ起つ」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月20日付。

「わが山陰名勝の興廃 けふ!この一日に!と…火花を散らす最後の奮闘ぶり」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月20日付。

「新八景投票終る ラスト・ヘビー! 血眼となって活躍 宍道湖を第一位にと自動車で疾走する」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月21日付。

「宍道湖投票最後の活躍」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年5月22日付。

「日本新八景 入選の誇りと喜び」、大阪毎日新聞山陰版、1927(昭和2)年6月7日付。

「宍道湖の新研究(1) 八十万円の年収をあげたい 島根県商工水産課長松坂龍雄」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月7日付。

「宍道湖の新研究(2) ゼネヴァのやうな遊覧地にしたい 松江商業会議所書記長大田直行」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月9日付。

「宍道湖の新研究(3) 斐伊川を掘った土を利用する者はないか 斐伊川改修事務所長山岸安二」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月10日付。

「宍道湖の新研究(4) 天恵を利用して地上の楽園としたい 松江市助役福田源治郎」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月11日付。

「宍道湖の新研究(5) 湖岸を埋立てて大いに活用したい 島根県耕整主任技師林直樹」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月12日付。

「宍道湖の新研究(6) 三百年もすれば湖水は埋るとの説 島根県史編纂委員 野津左馬之助」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月13日付。

「宍道湖の新研究(7) 年々湖が浅くなり、浚渫がしてほしい 合同汽船常務取締役 中島清次郎」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月14日付。

「宍道湖の新研究(8) 阪神地方と松江と結ぶ方法を講じたい 勸銀松江支店長板井賛次郎」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月15日付。

「宍道湖の新研究(9) 佐太川を改修して恵曇と松江を結べ 山陰松江水産取締役社長西谷龜之助」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月17日付。

「宍道湖の新研究(10) 遊覧都市としての衛生施設を完備せよ 県立松江病院長 錦織末富」、大阪毎日新聞山陰版、1928(昭和3)年1月18日付。

「遊覧客や物産をうんと宣伝しよう 『島根県振興会』の組織」、大阪毎日新聞山陰版、1930(昭和5)年4月5日付。